

あめ ひ
雨の日は

梅雨。それは天候がめまぐるしくかわるアジア特有の気象現象。その期間のほとんどが、雨に降られるという雨の季節：そんな季節のお話です。

「ひゃー、朝は降ってなかったのにい〜」

家路についていた少女は、突然降り出した雨に急いでかけだしました。持っていた鞆を頭の上にかざし、大急ぎで雨宿り出来そうな場所を探します。しばらく走ると、雨に映える綺麗な紫陽花が目に見え込みました。

「あれれ、こんな所に紫陽花なんかあったかしら…」

普段は気にもとめない風景なのに、紫色の鮮やかな色彩を放つそれはその存在を知らしめるかのように彼女の目に映りました。彼女はもっと近くで見ようと、紫陽花に近づきました。

すると、何処からか声が聞こえてきました。

「おうじょ…王女様…」

「？何か聞こえたけど…」

「王女様…」

今度ははつきり聞こえました。

「はい？」

彼女は目を疑いました。なんと喋っているのは、紫陽花の葉に乗っかっているかたつむりだったのです。

「王女様って、わたしはそんなじゃないわ」

「いいえ、あなたは私どもの王女様です。人間に擬態する事を覚えてしまった王女様は、自分自身がかたつむりであったことを忘れてしまったのです」

「うっそ」

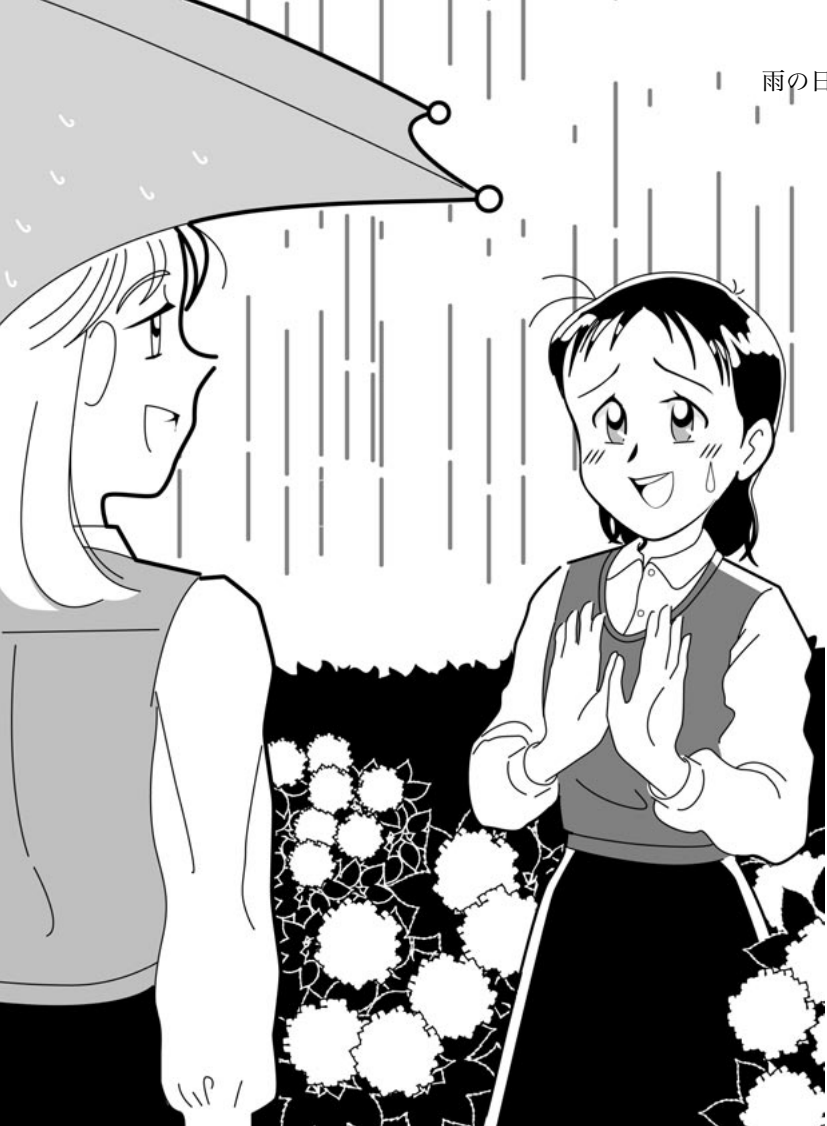
彼女は持っていた鞆を落としてしまうほど驚きました。

「嘘です」

「????」

「やつぱり引つ掛かったあ。こんなにうまく行くとはおもわなかったわっ」

雨の日は



紫陽花の影から、彼女の親友（悪友？）が出て来ました。

「ちよつとお！もう！」彼女は怒りました。

「こんなくだらないいたずらに引つ掛かるのはあなただけでしょう？まさか、信じた訳じゃないでしょうね？」

「そ、そんな訳ないぢやない」

彼女は頬をヒクヒクさせながら答えました。まさか、半分信じかけていた。なんて言えない彼女は、なんとかごまかそうとしました。

「もう、くだらないことさせるから、もつとぬれちゃったじゃない。雨の日つてやーね。」

そう言う彼女は、雨を吸ってしまったスカートの裾を持ち上げ、絞ってみました。

「：ついでにお尻も絞ったら？」

「あーっ！ お尻が冷たい、ゝゝ」

彼女の半身は、紫陽花に埋もれていました。

「あなたは悪友だわっ！」

「あら、今頃気づいたの？ きやははははは」

緑を背景に、淡い紫、濃い紫、淡い桃色に濃い桃色、雨にいきいきとはえる紫陽花を後に、二人は一本の傘に入つて家路につきました。

お
わ
り